

草互名之也。圖經云、春生藤蔓、大如釵股、高至丈餘、葉如茴香、極尖細而疎滑、有逆刺亦有澀而無刺者、其葉如絲杉而細散、皆名天門冬。夏生白花、亦有黃色者、秋結黑子、在其根枝傍、入伏後無花、暗結子、其根白、或黃紫色、大如手指、長二三寸、頗與百部根相類、然圓實而長、一二十枚同撮、

〔撮壤集中〕天門冬スイイクサ  
スヨロクサ 和類聚名 同下藥種 天門冬

〔饅頭屋本節用集〕草木スマウトリ 天門冬

〔多識編二蔓草〕天門冬須倍留久左異名天棘スミレ 万歲藤

〔書言字考節用集六生植〕天門冬テンモンドウ  
キシカクシ 天棘、万歲藤並同 天門冬テンモルクサ  
本草、蔓大如 銀股、高丈餘

〔古今要覽稿〕草木スマ すまろ草 天門冬

須末呂久佐本草和名、按に須岐末呂久佐の中略なるべし、須岐末呂とは即杉麻呂の意にして、猶以奈古を以奈古麻呂、猿を猿丸といふがごとし、俗に須岐加豆良といふも、また杉葛の意にして、杉葉に似て蔓延するがゆへなり、この形狀をかく杉葉に比していへるは、古今人情一つなればなり、天門冬テンモントウ  
本草 岡村尙謙曰、時珍の説に、草之茂者爲蘿、俗作門、此草蔓茂而功同麥門冬、故曰天門冬、故曰天棘、爾雅云、髦顛棘也、因其細葉如髦有細棘也、即門冬二合の音にして、また天顛通音なれば、天門冬は即顛髦の義なり、此草蔓延すること、頗る顛髦のごとくなるによりて名づく、時珍門冬を以て、功同麥門冬といへるは全く誤れり、蘿といひ門といふも、共にその音をかりていへるものなれば、その字に付て深意あるにはあらず、  
ソウチクソウチク カクシカクシ 緒體博物 頭棘テンゼキ 上 洗草テンゼイ 同 頭勒テンレ 上 蘿靡爾雅 蘿冬テンゼイ 同 婆蘿樹ボラツキ 上

〔和漢三才圖會九十六〕天門冬 蘿冬 頭勒 頭棘 天棘 萬歲藤 和名須末呂久佐略 中  
刺本草注 淫草蘆抱朴 管松カクソン 同 無不愈ムハツエイ 上 百部ヒャクボク 同 萬歲藤テンモルクサ 敦草 婆蘿樹ボラツキ 同  
按天門冬出於豫州字和島者佳、藝州廣島者次之、今漬沙糖食之、故可有與鯉合食不可不知、